

各種の焼却灰を併用した凝集剤の開発について

早稲田大学 学生員 ○景山 隆弘 早稲田大学 フェロー会員 赤木 寛一
 早稲田大学 学生員 李 理 早稲田大学 学生会員 三村 裕美

1. 目的

火力発電等の副産物として、毎年多量の焼却灰が発生しており、その様々な再利用の方法について検討されている。現在、PS灰(Paper Sludge)は骨材、路盤材、セメント原料などに再利用されている。またバイオマス灰は増加しているもののほとんどが埋め立て又は最終処分されている。再利用最終処分場の容量不足解消や環境負荷の軽減のため、更なる新しい分野での焼却灰の再利用が必要である。そこで、本研究では焼却灰を利用した凝集沈降剤を開発することを試みている。焼却灰の物理的、化学的な分析を行い、既往の研究結果に基づいた適切な添加剤を選択し、作成したブレンド材料を粘土系の対象汚泥懸濁液に添加し、汚泥懸濁液の凝集沈殿特性の実験的検討を行った。

2. 凝集沈降試験¹⁾

2.1. 試験概要

各種焼却灰添加による凝集性能への影響を検討するために、カオリン、Na型ベントナイトの混合土サンプルを用いて、沈降速度とゼータ電位を調べた。

2.2. 使用する試料の基本性質

本試験で使用する試料の物性値²⁾と化学組成を表 2.1, 2.2 にまとめる。

表 2.1 PS(Paper Sludge) 灰、バイオマス灰とカオリンの物性値

	PS 灰	バイオマス灰	カオリン
比重(g/cm ³)	2.72	2.33	2.61
初期含水比(%)	0.60	0.45	0.24

表 2.2 PS 灰、バイオマス灰とカオリンの化学組成(mass%)

	CO ₂	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	CaO
PS 灰	13.1	3.16	21.7	14.0	48.3
バイオマス灰	22.7	2.03	7.3	28.8	14.9
カオリン	3.74		21.7	72.6	0.10

2.3. 試験手順

試験手順は、以下の通りである

- ① 水 1000ml に、カオリン 8g, Na 型ベントナイト 2g を添加し、汚泥サンプルを作成する。
- ② 焼却灰を添加するサンプルはここで添加する。
- ③ 無機凝集剤 1g を添加する。
- ④ pH 調整剤として NaOH(aq) を添加する。
- ⑤ 急速攪拌(120rpm)を 5 分間、緩速攪拌(60rpm)を 20 分間行う。

A) ゼータ電位測定の場合

- ⑥ 1 分静置後、試料を採取しゼータ電位を測定する。
- B) 沈降速度測定の場合
- ⑥ サンプルを 1L メスシリンダーに移し、高分子凝集剤を添加する。
- ⑦ メスシリンダーを 10 回振り、凝集を促す。
- ⑧ 攪拌を終えた瞬間を 0 秒としてサンプルの固液界面沈降量を測定した。固液界面沈降量より、初期接線の傾きを沈降速度として算出する。

2.4. 試験条件

表 2.3 に試験条件を示す。

表 2.3 試験条件

無機凝集剤	PAC, 焼却灰
無機凝集剤添加量(g/L)	1.0
高分子凝集剤	アニオン系
高分子凝集剤添加量(g/L)	0.01
pH	4.3~9.8
pH 調整剤	NaOH(aq)
粘土	カオリン Na 型ベントナイト
粘土割合 (g/L)	10
水温(°C)	20±2.0

なお、無機凝集剤添加量 1.0(g/L)は次のように定めた。

$$\text{無機凝集剤 } 1.0(\text{g}) = \text{焼却灰}(\text{g}) + \text{PAC}(\text{g})$$

2.5. 実験結果

2.5.1. ゼータ電位

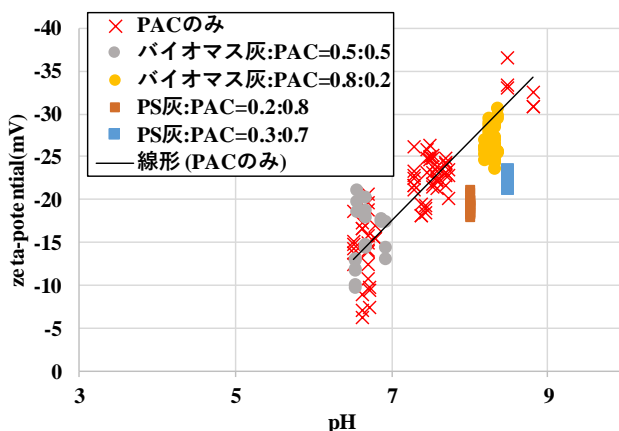


図 1 焼却灰添加時の pH とゼータ電位の関係

キーワード 焼却灰 凝集剤 ゼータ電位

連絡先 〒169-8555 東京都新宿区大久保 3-4-1 58 号館 205 号室 TEL:03-5286-3405 E-mail:s.ariura@kurenai.waseda.jp

図 1 は、PAC、PS 灰とバイオマス灰を所定の割合で添加した各サンプルの pH とゼータ電位の関係を表したものである。これより、PAC のみを添加し、pH を調整したサンプルにおいて、ゼータ電位は pH に大きな影響を受けることが分かる。サンプル数は少ないが、PAC のみを添加した場合には、pH とゼータ電位の間に比例関係があることが推測される。この推定関係を用いると、バイオマス灰を添加した場合はゼータ電位に大きな変化は見られないということが確認できる。一方、PS 灰を添加した場合、ゼータ電位が低下したと考えることができる。

2.5.2. 沈降速度

高分子凝集剤添加後、メスシリンダーを静置し、各時刻における固液界面に相当する箇所のメスシリンダーの目盛りを読み取り沈降曲線を描く。沈降量は、懸濁液をメスシリンダーに移し、気液界面（水面）を沈降量 0 mm とした。沈降速度は、初期の攪拌による誤差を減らすため、攪拌後 5~15 秒における沈降曲線の傾きを採用した。

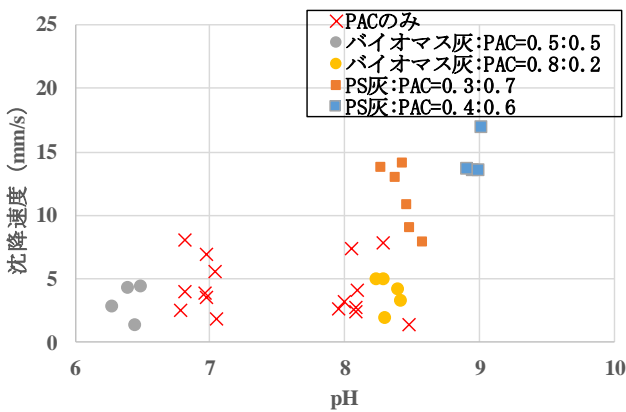


図 2 各サンプルの沈降速度

図 2 は、各サンプルの pH による沈降速度の変化を示したものであり、PS 灰添加のサンプルでは、沈降速度の改善が見られた。また、バイオマス灰添加サンプルでは、PAC のみと比較して沈降速度の低下が見られた。

3. 考察

図 2 より、高分子凝集剤の凝集可能範囲よりやや高い pH (pH=9 程度) において、PS 灰を添加したサンプルは、PAC のみのサンプルに比べて沈降速度が改善したことが分かる。一方、凝集可能範囲以内の pH (pH=8~8.5 程度) において、バイオマス灰を添加したサンプルは、PAC のみのサンプルに比べて沈降速度が低下したことが分かる。沈殿物フロックの沈降は、単一粒子の沈降速度を求める式として、通常ストークスの式(1)が適用される。

$$v_t = \frac{g(\rho_s - \rho_w)}{18\eta} D_p^2 \quad (1)$$

v_t : 沈降速度(cm/s)

ρ_s : 土粒子の密度(g/cm^3)

ρ_w : 水の密度(g/cm^3)

D_p : 粒径(cm)

η : 流体の粘度($g/(cm \cdot s)$)

重力沈降するような大きいフロックになるには、高分子凝集剤の働きが重要となる。高分子凝集剤は、架橋効果を起こしてフロックの生成を助長するが、対象の粒子が一定以上の大きさであること、pH が適正な範囲内に収まっていることなどで効果が発揮されやすくなる。

図 1 より、PS 灰を添加したサンプルは、同程度の pH である PAC のみのサンプルに比べてゼータ電位が低いことが分かる。この理由として、表 2.2 より PS 灰がカルシウムを多く含むことから、溶液中に溶けだした 2 価の陽イオンである Ca^{2+} が負に帯電した土粒子表面近傍に集まり、粒子間の斥力を弱めたためであると考えることが出来る。ゼータ電位の低下は凝集を促し、粒子を大きくすることで高分子凝集剤の働きを活性化させる。このため PS 灰は凝集作用の向上に効果があると言える。一方で、バイオマス灰を加えたサンプルと、PAC のみのサンプルのゼータ電位はほぼ等しいことが分かる。この理由として表 2.2 より、バイオマス灰は PS 灰に比べてカルシウムが少ないため、溶出する Ca^{2+} の量が少なく、粒子間の斥力を弱める力が小さいためであると考えることが出来る。これより、バイオマス灰は凝集作用の向上に対して効果が低いと考えることが出来る。また、既往の研究より、ゼータ電位の大きさが小さいほど粒径が大きくなりやすいことが分かっている。これと式(1)より、沈降速度が速くなると考えられる。

4. まとめ

本試験において、PS 灰を凝集剤として用いた場合、凝集速度の向上が見られた。今回用いた PS 灰は、バイオマス灰と比較してより多くのカルシウムを含有しているため、添加時に溶解するカルシウム量も多く、凝集作用が生じ凝集性能が向上したと理解できる。

今後は、様々な焼却灰とその組成による凝集性能への影響を検討していく。

参考文献

- 1) 井上, 赤木, 檜垣ら: 再生石膏を用いた無機系および高分子凝集剤併用による建設発生土の沈殿特性(土木学会年次学術講演会 2015)
- 2) 地盤材料試験の方法と解説 地盤工学会(2009)
- 3) 澤, 友久: 産業副産物の混合による泥土の改質について(2004)日本材料学会ジャーナル Vol. 53, No. 1, pp. 21-24
- 4) 亀井, 小川, 志比: 半水石膏と石炭灰を添加したセメント安定処理土の強度変形特性とその内部構造—ハイブリッド型地盤材料の創出—地盤工学会ジャーナル(2010)Vol. 5, No. 1, 35-43
- 5) 木下, 氏家, 河合, 川口, 安原, 長江 資源・素材学会ジャーナル(2017)Vol.133, No.6
- 6) 高橋, 富田, 若林, 山田, 折橋, 古賀 木質系バイオマス燃焼灰の安全性評価および有効利用 廃棄物学会研究発表会講演論文集(2008)VOL.2, No.19, 627-629